

共通論題「地政学リスクと証券市場」 「地政学とは何か」

奥山真司(国際地政学研究所)

本発表では、「地政学リスク」よりも、その元の言葉となっている「地政学」(geopolitics)という考え方とその歴史を簡単に振り返りながら、現在の国際情勢について「地政学」ではどのようにとらえられ、そしてこの不確実な未来にどのように対処すべきなのかを、戦略学寄りの議論からアプローチする。

従来の意味の「地政学」だが、現在は欧米の学界において「批判地政学」と「古典地政学」という二つの分野で研究されているが、「地政学リスク」に近いのは軍事色や帝国主義的な色彩の強い「古典地政学」であり、これが現在に至るまで、国際関係論のリアリズムという学派や、戦略学、そして安全保障研究では触れざるをえないものとなっている。

ではこの古典地政学的な視点から見れば、現在の世界はどのように見えるかといえば、「海の勢力」と「陸の勢力」の戦いというイメージが前提であり、そこから「海の勢力で世界を制したアメリカ」が、「それ以外の陸の勢力」に挑戦を受けているという構図が浮かび上がってくる。冷戦時代は米ソが海と陸での死闘を演じた後に勝利したが、それをフクヤマは民主制度の勝利だとして「歴史の終わり」と説明し、国際関係論の世界では「一極構造の時代」と説明されるようになった。

ところが現在ではこのフクヤマのビジョンは崩れ去り、冷戦後には「海の勢力」の力が弱まった、いわば「多極時代」が訪れていると言える。冷戦後にはハンチントンをはじめとする実に様々な地政学的ビジョンが出されたが、とりわけ注目したいのはグリギエルとミッチェルという元国務省の学者たちが古典地政学の議論を活用しながら「覇権国であるアメリカが、中国・ロシア・イランという現状変更国家から低烈度の挑戦を受けている」とする分析だ。

ではこのような地政学的な状況に対して、戦略家たちはどのように考えているのだろうか？一人目はルトワックのパラドキシカル・ロジックという概念だ。紛争には相手があり、その相手が対抗してくるために状況が逆説的になるというのがその論理のエッセンスであるが、この「人間が人間である限り混沌は続く」という前提は、国際政治環境におけるダイナミクスをうまく説明できている。もうひとはギャディスが『大戦略論』で展開する、現実には矛盾だらけであり、それを当然のように受け入れて物事を考える思考方法なのかもしれない。

明治期に活躍したジャーナリスト・思想家の中江兆民は、「三酔人経綸問答」という短編の中で「世界をどう見るか」というテーマを論じる際に、軍事力が世界を動かしていることを強調する「豪傑君」というキャラクターを登場させてい

るが、我々はこの「豪傑君」の世界観を忘れがちであるところに、本当の「地政学リスク」が潜んでいるのかもしれない。